The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞岩坪健著『源氏物語古注釈の研究』
Author(s)	中村, 一夫
Citation	語文. 2002, 78, p. 56-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69004
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

岩坪健著『源氏物語古注釈の研究』

中村一夫

源氏物語注釈書の嚆矢と目される院政期の『源氏釈』以来、歌学とともに重要視された源氏学は多種多様な注釈書や梗概書・辞書を大量生産していった。それぞれの書を源氏物語の研究史に照らして評価すると、まさに玉石混交の状態であるというより他はないが、こと物語の享受や伝授という側面から捉え直すと、どの書も確固たる存在意義を有し、それぞれの記述の様態からは当時の社会の構図や文化的状況が浮かび上がってくる。本書は「中世に編まれた源氏物語の古注釈書を、様々な観点から六編に分けて考察したもの」(序)である。すなわち「本文伝流史における注釈書の引用本文」「御子左家の源氏学」「南朝における源氏学」「連歌師の源氏学」「三条西家の源氏学」「家説の秘蔵と伝授」の六編であり、巻末には「和謌秘書集」(刈谷市中央図書館村上文庫蔵)の翻刻が付される。各編には三章ずつの論考が整然と配列され、以下の点について考究される。

まず第一編では古注釈書における引用本文の問題が取り上げられる。鎌倉時代に編纂された源氏物語の青表紙本と河内本の両系統の本文のうち、定家崇拝の定着していく室町時代前期以降は青表紙本が主流となるが、それ以前は河内本が優勢であったと推察される。これは南北朝末期までに成立した注釈書の本文に河内本が多いことを根拠とする。しかし、鎌倉中期から室町初期に成立した『異本紫明抄』『仙源抄』『類字源語抄』『師説自見集』などに収載される物語本文が河内本であるのは、勘物を引用するために利用した河内方古注釈の本文をそのまま転載したからであり、従来の河内本優勢説は再検討の余地があると指摘する。従うべき卓見であろう。続く第二編から第五編では時代や学派ごとの注釈書を対象とし、御子左家・南朝・連歌師・三条西家などの学問が論の対象となる。ここでは藤原定家をはじめとして、今川了俊・長慶天皇・後醍醐天皇・宗祇・肖柏・三条西実隆ら中世源氏学の錚々たる面々が俎上に載せられ、研究史・享受史の中に適切に位置づけられている。そして第六編では中世における物語伝授の作成方法や行われ方が論じられる。当時の学問の教授では秘伝が重視され、師匠が権威を保持するための秘説は容易に公開されることがない。ところが、秘説を死蔵すると世間には認められず、名声も門人も得られないことになる。そこで二種類の注釈書を用意して、一般門人には秘蔵しながら、特定の人には秘説を授けるという二段階伝授が行われていたとする。『原中最秘抄』の系統の比較、『河海抄』と『珊瑚秘抄』の関係や『花鳥余情』と『源語秘訣』の関係などから、行阿、四辻善成、一条兼良らの源氏物語伝授の方法が明らかにされる。氏の業績の中でも特に広く知られる高説である。

本書所載の論考には注釈書の引用が多く、また細かなピースを組み合わせるかのごとき検証が続くので、氏の実証・論証に付き合うのは、かなり骨の折れることではある。しかしながら、広範な資料調査とそれに基づく詳細な分析には敬服するばかりであり、難渋で混沌とした中世源氏学を鮮やかに腑分けする岩坪氏の手法と指摘は、多くの新知見と視野を提示したものといえよう。

(和泉書院、一九九九年二月、四三〇頁、一四〇〇〇円)

――大阪樟蔭女子大学非常勤講師、本学大学院博士後期課程――